

気象学用語集のホームページ作成に向けての意見聴取のお知らせ

気象用語検討委員会

1. はじめに

気象用語検討委員会（以下、用語委員会と略記）は第30期理事会のもと1998年に設けられて以降、気象用語に関して鋭意検討を続けて参りました。いろいろと論点が多く、検討に多大の時間を要しましたが、ようやく成案（の一部）が完成しました。しかし用語には専門性の高さが関係し、我々用語委員会のメンバーだけでは検討が不十分である恐れがあります。また第3章以下に詳しく説明しますが、気象用語集をWEB版として気象学会のホームページに掲げることになりました。従って新しい用語集は学会と一般の方との接点になるものであり、そのスタイルなども含めて、広く意見を募ったほうが良いということもあります。そこで現時点での成案をお示しし、広く学会員の皆様からのご意見を募ることにした次第です。

まず第2章で「意見聴取の内容・方法・期間」についてお示しします。時間のない方はここだけを読んで意見をお出しただいで結構です。また第2章だけではこのような形で用語を公開する経緯・理由等に疑問を持たれる方も多と思います。そのような場合は、少し長くなりますが、第3章以下の文をお読み下さい。なお第3章は「歴史・経緯」を書いていますので、もう少し簡略して読みたい方は第4章「用語集を構成するもの」から読んでいただいても結構です。

なお念のため申し添えますが、用語集に掲げられた用語はひとつの基準を与えるもので、個人の好みまで規制するものではなく、「天気」その他の学会誌の表現はこれに従わないといけないという性質のものではありません。ただしもし好みの問題がなければ、これがひとつの基準になりますので、積極的に活用していただくことを期待しています。

以下で用いる「用語」という言葉は一般的には日本語の用語を指します。ややこしい場合は日本語用語と書くこともあります。英語の用語は単に英語または英語用語と書きます。また現在の「文部省学術用語集気象学編（増訂版）」を「87年用語集」と略記することにします。

2. 意見聴取の内容・方法・期間

「87年用語集」を発展させた新しい用語集をWEB版として気象学会のホームページで公開します。その原案を以下のURLに置いています。

http://www.soc.nii.ac.jp/msj/member_pages/yogo_temp/index.htm

用語集はいくつかのパートに分かれますが、そのうち「基本用語集」、「用語集の説明」、「別表」の3つのみを最初に公開します。従ってこれらが今回の意見聴取の対象です。一般向けに公開されるスタイルと同じ形で示しています。

現在のところ、一般の方には非公開としています。従って気象学会のホームページからはたどりませんので、ご注意下さい。また意見聴取の間は当然ながら暫定版です。この形での引用・複写は厳禁します。この点よくお守り下さい。

意見聴取の内容は以下の2点です。

- (1) 基本用語について。例えば、この用語は省いたほうがよい、入れたほうがよいなど基本用語の選択範囲や、用語・英語の適切さなどに対する意見
- (2) その他、WEB版用語集のスタイル、「別表」、「用語集の説明」の内容など、その他用語に関わる意見。

WEB版用語集は気象学会の責任のもとに公開する以上、間違いのないものにする必要があります。また学会と一般の方との重要な接点になるものですから、学会の顔という面も持ちます。さらに気象学会員にとっても使いやすいものにしたいものです。用語集をよりよいものにするために、皆様の積極的なご意見をお願いします。

ご意見はすべてEメールにて以下へお送り下さい。
yogo@peace.ocn.ne.jp

ご意見ではなく、質問のある場合も質問であることを明記の上、同じところへお送り下さい。Eメールを使われない方は気象学会用語委員会宛に郵便で出してくださいでも構いません。いずれにしても用語委員個人宛には送らないで下さい。

意見提出の締め切りは5月15日です。約2か月半の意見聴取期間を設けることとなります。

なお当然のことながら出された意見がそのまま採用されるわけではありません。用語委員会で改めて検討させていただきます。また検討結果をフィードバックすることもあります。場合によってはできないこともあるかもしれません。以上の点はご了解下さい。

3. 歴史・経緯

3.1 発端と用語委員会の発足

2000年までの経過は「第30期気象用語検討委員会の報告」天気47（2000）520～525ページに詳しく書かれています。そもそもの発端は小倉「気象学術用語の日本語訳について」天気43（1996）194～195ページで、適切な日本語訳のない気象学術用語の問題が指摘されています。

第30期では少人数（6名）で用語や委員会のあり方が討議されました。まとめとして、

- 1) 気象用語集の改訂や刊行にあたっては、「これまで、どこでどのような問題が起き、誰が何を求めているか」を具体的に明確にし、目的を絞らなければならない。
- 2) 気象学会には初等中等教育気象用語、社会的気象用語（適切な和訳を含めて）を定める社会的責任がある。
- 3) 初等中等教育気象用語については、無闇に用語を増やすべきではない（日本の教育環境においては気象学を暗記もの教科にしない配慮が特に必要である）。
- 4) 分かりやすく適切な日本語訳が望ましいが、無理に和訳すると難解になるおそれがある。
- 5) 文字（印刷）だけでなく発音にも留意が大切である。漢字熟語に執着せず形容詞の活用も有効であろう。
- 6) 専門学術用語には無理に和訳を作る必要性は薄い。
- 7) 気象用語の場合、「大気科学学術用語」、「教育用語」、「気象業務用語」、「防災用語」、「社会的（放送用語を含む）用語」の間に現実に差異がある。これまでその差異にあまりにも無神経であった。これからはこの問題を意識しなければならない。また、国際用語と国内用語の乖離（例えば typhoon と台風）にも注意しなければならない。
- 8) 初等中等教育用語集かつ社会的用語集の役割をかねる学術用語集（学術審議会学術用語分科会）の改訂追補のため、および専門用語集の充実のため

の常設委員会が必要である。

- 9) 気象学会編と明記するからには学会として責任を持ってオーソライズしなければならない。気象用語には多くの問題があり多面的な検討が必要であるから、少数の専門家だけに任せず、多くの会員の査読意見を聞く必要がある。キチンとした用語集を完成させるには片手間仕事では不可能であり、それなりの組織が必要である。現実には責任の果たせる人材は極めて多忙であり、用語集の完成は容易ではない。

と書かれています。

3.2 2000年以降の経過

30期で方向性がかなり明確になったのを踏まえ、31期の主な仕事は新しい学術用語集の作成をめざして、具体的な用語の選定作業となりました。そのためには幅広いメンバーが必要ということで、9名によって31期の委員会が構成されました。多くの本や事典類を参照するなど旺盛な選定作業の結果、英和、略語（組織研究計画・衛星測器）に分けた多くの用語が選定されました。

以下が31期の任期終了時における用語委員会の報告です。

第31期気象用語検討委員会の報告

第30期気象用語検討委員会の発足に至った経緯、および、その活動報告は天気47巻7号に掲載されている。この委員会による気象用語の問題点についての基本的討論を踏まえ、第31期には委員会メンバーを増強し、具体的な用語選定作業を開始した。その基本方針として、まず既刊の学術用語集等を参考に、英語用語をリストアップし、適切な日本語訳（案）を付し、同時に基本用語（初等中等教育用語、一般気象用語）、準専門用語、専門用語、必要性・妥当性に問題がある用語（訳語）、すでに死語となった用語・使用が好ましくない用語の5種類にランク付けする作業を開始した。各委員はそれぞれの本来業務で多忙であり、作業は予定に比し大幅に遅れたが、2002年5月現在、各委員の努力の成果である各担当分野の原案が寄せられるに至った。予定では、これを広く学会会員に公開し意見を頂き改定を行うはずであったが、この時点で31期の任期が終了することとなった。したがって、この原案を32期委員会に引継ぐと共に、31期委員会の責任において、気象学会のホームページに公開する。すでに30期委員会報告に述べたように、気象用語には考慮すべき問題が

多々あり、広い観点からの検討が望まれる。2001年にはアメリカ気象学会の Glossary of Meteorology の改訂版が刊行された。このためには多くの専門家が長期間に亘り協力参加している。この様な体制は今後我々も参考にすべきであろう。

しかしながら様々な理由でホームページ公開には至りませんでした。

第32期では当初、主担当理事が決まらずに推移しましたが、ようやく2002年12月に主担当理事が決まり、続いて2003年4月に委員が承認されました。その際、学術審議会の改変に伴って、「学術用語集」の今後の発行計画はないという事実が判明しました。そこで第32期では以下のような方針を定めました。

- (1) 「87年用語集」に代わるものとして、気象学会のホームページに用語集を掲載する。
- (2) 近い将来は主要な用語や意味の取りにくい用語にはごく簡単に説明を付けた用語集として完成度を高めていくことをめざす。

その後、30期のまとめの1), 2), 3), 7)に基づいて、用語集を「基本用語集」と通常の「用語集」に分けて、作業を進めていくことにしました。ただしここからは基本用語の定義・選定・適切な訳語などで多くの困難が発生し、なかなか進行しませんでした。

33期の委員会は32期をほぼ引き継いで発足しました。そこで基本用語を明確に定義するとともに、基本用語の選定、基本用語にふさわしい用語の設定などの作業を進めました。しかし「87年用語集」、先行する用語集 (Glossary of Meteorology など)・事典類にはいくつかの誤りのあることもあり、正確さを期すために多大の時間を要しました。そしてこのたびようやく成案 (の一部) が完成した次第です。ここに至るまでには多くの方のご協力がありました。ひとりひとりお名前は掲げませんが、協力いただいた皆様に深く感謝します。

4. 用語集を構成するもの

第3章で詳述しましたように、今回の用語集は本としてではなく、WEB版として出されます。まず「87年用語集」から変わった点を挙げてみます。

- (a) 用語集を大きく2つに分け、「基本用語集」と「用語集」としました。基本用語集の内容・意図はこの後ろで説明します。
- (b) 備考欄を設けました。この欄にニュアンスの違い

や似た用語の使い分けを書くことによって、利便性が増したものと思います。

- (c) 読みをローマ字からひらがなへ変えました。このほうが読みやすいと思われます。
- (d) 日本語のみの用語も掲載しています。対応する英語がないという情報も必要であるという考えに基づいています。
- (e) 英語のスペルは基本的にイギリス語からアメリカ語へ変えました。ただし固有名詞にはイギリス英語も用いています。
- (f) ひとつの英語用語 (日本語用語) に対する日本語用語 (英語用語) は複数であるものがかかり多くなりました。このほうが使用には便利であると考えたためです。
- (g) 略語のうち特別な読みをするものはその読みを入れました。例えば TRMM (とりむ) です。このような変更で「87年用語集」よりかなり使いやすいものになっていると思います。

さてWEB版用語集は以下のものから構成されま

- (1) 用語集の説明(「気象学用語集とその使い方」と「基本用語集について」)
 - (2) 基本用語集
 - (3) 用語集
 - (4) 略語集
 - (5) 別表 (a) 熱帯低気圧 (b) 風力階級 (c) 雪の結晶の分類 (d) 単位について (e) 気象学でよく用いられる定数表
 - (6) 使用において注意を要する用語
- ただしこれらのうち「用語集」、「略語集」、「使用において注意を要する用語」はなお検討に時間を要しますので、当面はタイトルのみとなります。以下、これらについて説明します。

基本用語とは大学教養教育程度以下の用語および一般気象用語 (社会的気象用語) を指します。大学教養程度の教科書はここに挙げられている用語を用いて書けるということを意味します。またこの程度の用語であれば、文系の人も十分に理解可能であろうということで選定しています。気象学会関係者・専門研究者以外はたいいてこの用語集で間に合うと思います。約1000語が採録されています。ただし一般気象用語については必ずしも十分な数を採録していません。気象学会ということで、多少なりとも学術的な用語を優先して採録しているためです。

「基本用語集」を「用語集」から独立して設けたのには2つの意図があります。1つは気象学会関係者・専門研究者以外の方にも多く利用していただきたいということです。基本的な現象・概念をできるだけ平易に表現することを心がけました。今のところ意味が付けられていないので、なお使いにくいことがあると思いますが、将来は各用語に簡単な意味を付ける予定です。2つ目の意図は、気象学会関係者・専門研究者に大学教養教育程度以下の教科書や本を書くときの参考にしてほしいということです。過度に専門的な用語を排除し、概念的にも表現的にも適切な用語を選択することは教科書にとってたいへん重要なことだと思われまます。本用語集によって、用語の適切さ・統一性が図られれば、気象学の啓蒙・普及という点で大きいものがあると思われまます。

一方、「用語集」は気象学や関連分野において用いられる数多くの用語を網羅します。基本用語も含めます。過去の本や論文を読む際の便宜を考えて、すでに古くなった用語（現在では使われない用語）も注釈を付けて採録する予定です。ページ数の制限がないのでかなりの語数になる予定です。従って完成にはなお時間が必要です。

「略語集」は基本的には「87年用語集」と同じスタイルの予定です。ただし略語は時間的な変化が大きく、かつ数がたいへん多くなっていますので、採録するのになお時間が必要です。

利用者の便宜を考えて、「別表」を作成しました。用語集の中に埋められると全体が理解しにくいので、全体を提示するためです。「87年用語集」と比べると、同じものと新しく付け加えたものがあります。また「87年用語集」に採用されていても今回は取り上げなかったものもあります。「熱帯低気圧」、「風力階級」、「雪の結晶の分類」は基本的に「87年用語集」と同じです。「単位について」は大幅に書き直しました。できるだけ使いやすくするため、表記の仕方の基本ルールなども加えました。「気象学でよく用いられる定数表」は新たに加えたものです。類似のものもたくさんありますが、用語集ということで英語表記を加えたことと、できるだけ正確な値を典拠とともに与えている点が目新しいと思います。学術用語集から削ったもののうち「雲の分類」は必ずしも表にしなくてもいいと考えたためです。その他の表は雪氷学会のほうがよりふさわしいと考えたためです。

「使用において注意を要する用語」はすでに死語に

なっているにもかかわらずしばしば使われている用語や使用が好ましくない用語、使用において注意を要する用語をまとめたものになる予定です。気象学会関係者以外の本にはしばしばそのような用語の使用例が見られます。また学会関係者でも専門を離れたところでは、すでに使われなくなったかどうかの判断は難しいものがあります。これらの使用をできるだけ抑制してもらうために特別に設ける予定にしているものです。ただし実際的にはその判断には困難なものがあります。そのためなお検討を続けたいので、今回は意見聴取の対象とはしませんでした。

5. 基本用語集

基本用語集はたいへん重要なものと位置づけていますので、上と重なるところもありますが、特別に詳しく説明します。

5.1 基本用語の定義と「基本用語集」作成の基本方針

定義は大学の教養教育程度以下の用語および一般気象用語です。

基本用語なので、できるだけ簡潔に見やすく仕上げるとともに、首尾一貫したものにしています。類似の意味の語がたくさん掲げられているより、できるだけコンパクトな方が見やすく、使いやすいと思います。従って類似の語が多い場合は、主要なものだけを掲げています。

5.2 基本用語選定の基準

上の定義に基づいて選定しています。さらに簡潔性と一貫性のために次のような基準も設けました。

- 用語はすべて名詞のみとしています。
- 一般的な用語（日常用語）に関しては、まったくの一般語句は入れないで、科学的な用語を入れるという方針をとっています。
- 一般的な物理・化学用語については、これらを排除する立場はとっていません。基本用語は大学教養教育程度以下なので、高校以下で習う用語で、かつ気象と密着度の高い用語を入れています。
- 気象との境界分野（海洋や超高層、雪氷など）の用語も基本的なものは、気象学との密着度によって入れています。基本的には大気と接しているところで生じているものやこと、従って直接的に大気と関係しているものやことに対する用語のみとしています。
- 測器、気象衛星関係では、古いものはすべて省きま

した。ただし気象の観測現場で使われていないものでも、教育用として使われているものは残しているものがあります。

- ・組織は現存のもののみとしています。
- ・上でも書きましたが、類似表現はできるだけ少なくし、より主要な用語のみを掲げました。例えば、～map と～chart と両方の表現がある場合、基本的にはどちらか一方にしました。
- ・特別な意味を持つものや重要なものは除いて、複合語はできるだけ少なくするという方針を取りました。同様に、「～of～」や「phenomena (on)」という語句はできるだけ少なくしています。例えば、～disaster, ～damage, ～warning, ～advisory (or watch) 等は基本的にすべてなくしました。例外は meteorological disaster と natural disaster のみです。damage もそれ自身は一般用語なので取りあげていません。
- ・略語は基本的にはすべて省きました。例外は AMeDAS のみです。
- ・日本語のみの用語はよく使われる用語（特に季節に関わる用語）に限っています。

5.3 用語に関する方針

上のような「基本用語集」の主旨からいくつかの配慮をしましたが、特に重要なのは以下の点です。

- 英和において、ひとつの英語に対して、日本語化していないカタカナ書きのみの用語しか対応しないということはできるだけ避けるように配慮しています。一般の方にもできるだけハードルを低くする意味です。学会関係者には少し違和感のある表現もあるかもしれませんが、このような意図に基づいています。もし別のいい表現があれば、積極的な提案をお願いします。
- 英和において複数の用語のある場合は、用語の順序が意味を持っています。順序に関する詳しいことは「基本用語集について」をご覧ください。
- 和英において、複数の英語用語のある場合は、(b)のような強い意味は持っていませんが、前のほうが基本的にはより一般的である英語か、またはよく使われる英語になっています。

5.4 いくつかの用語に関する説明

「87年用語集」と異なる用語、英語用語が多くあります。ただしこれらひとつひとつの理由を書くと、たいへん長くなりますので、多くは省略させていただきます

す。必要な場合は質問をお願いします。ここではごく少数の用語についてのみ説明を加えることにします。

- ・「冷たい雨」と「暖かい雨」を基本用語から除いたことについて

「冷たい雨」と「暖かい雨」は高校の教科書にも出てくる「基本的」な用語です。しかしあえて基本用語からは除きました。それには2つの理由があります。まず第一は、これらが一般的な言葉としての「冷たい雨」と「暖かい雨」(後者はほとんどないかもしれませんが)と混同されやすいことです。第二に、最近のいくつかの教科書や用語集では、ice process や collision-coalescence process (または関連する用語) という降水の基本的なプロセスを端的に表現し、かつ紛れのない用語が用いられ、clod (cool) rain や warm rain は用いられていません。例えば、アメリカ気象学会の Glossary of Meteorology では cold (cool) rain という用語がなく、Glossary of Weather and Climate では両者がともにありません。すなわち以前に比べ、「冷たい雨」と「暖かい雨」という使われ方は減っている傾向にあると思われます。このような理由から「冷たい雨」と「暖かい雨」を基本用語から省きました。

- ・異常気象にあたる英語について

異常気象は日本語ではたいへん使用頻度の高い用語です。「87年用語集」はこれに対して abnormal weather という英訳をあてていました。しかし abnormal weather は一般的にはほとんど使われません。それでより一般的に使われる extreme [weather] event ([] は省略可能であることを意味します) をあてることにしました。ただしこれには、低気圧がたいへん強く発達する場合などは極端現象(または顕著現象)と訳され、異常気象とは明らかに異なる用法もあります。それで、和英は異常気象→extreme [weather] event とし、英和は extreme [weather] event→異常気象、極端現象としています。

- ・band を「バンド」とすることについて

band は「帯」と訳されるほうが一般的と思われる。ただしここでは「バンド」のほうを基本としました。その理由は、「帯」は zone や belt の訳にも使われ、一般の方に混同されやすいと考えたためです。precipitation band を降水帯と訳す場合を例にとります。この降水帯という用語は多雨帯と混同されたり、例えば 1000 mm～1500 mm の降水帯 (precipitation zone) という使われ方と混同されたりするおそれがあります。その点、「バンド」なら紛れがありません。また「バン

ド」という言葉は基本的に日本語化していると考えられます。以上の点を考慮して、band は「バンド」を基本としました。現在の使用頻度を考慮して、第二の訳として「帯」も残しています。なお outer rainband 外側降雨帯だけは例外です。外側降雨バンドという表現はまずないことと紛れがないことが理由です。

5.5 別表との関係

基本的と思われる用語でも、単位はすべて別表に入れました。また雪の結晶形もすべて別表で表現しました。熱帯低気圧の分類と風力階級にある用語もいくつかの例外 (tropical depression, typhoon, hurricane, calm, breeze) を除いてすべて別表に入れました。